

特集

「譜読み」をレッスンする

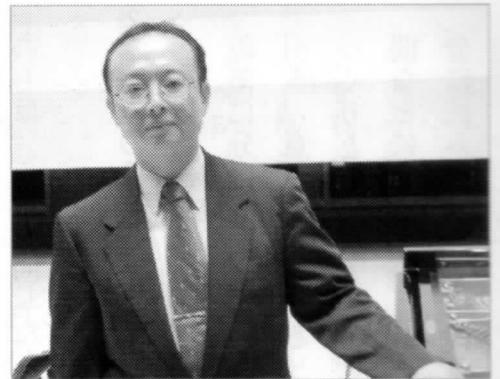
初歩のうちから音楽力を養おう

大竹道哉・小山和彦

音楽を読む譜読みへ

「音名」を読みますか？

それとも「音楽」を読みますか？



大竹道哉

おおたけ・みちや
ピアニスト・大阪音楽大学非常勤講師

ピアノ・レッスンの現場で、新しい曲の「譜読み」の方法をレッスンすることは、今まであまりされていなかったように感じます。

先生は、生徒に新しい曲を指定し、「来週までに読んでくること」と言います。そこで生徒が初めて新しい曲と出会う時、楽譜の「何を」読んでくるのでしょうか。「楽譜の中にある生きた音楽」なのかが大きな問題です。

生徒が無神経に音を順番に押すことだけで、「譜読みは終わった」と思っていないでしょうか？

そこで、「本を読む」ことを考えてみま

しよう。「本読み」が終わるといのは、正しい抑揚で、正しい文節で読み、状況や主人公の気持ちなど、ストーリーが理解できた時点で言えることです。

つまり、「本読み」が終わったというのは、「文字を順番に発音できた」ことではない。同じように「譜読み」が終わったというのは、「鍵盤を順番に押せた」ことではないはずです。ひと昔前(?)のコンピュータの発する人工音声のような「ワ」「ガ」「ハ」「イ」「ハ」「ネ」「コ」「デ」「ア」「ル」「ナ」「マ」「エ」……では、「本を読めた」ことにはなりません。

私は、「譜読み」⇨「音楽を読み取る」と定義します。また、練習の初期段階で「音楽を読み取る」ことは必要不可欠であり、レッスンの現場において、その方法を教えていくべきだと思います。

なぜ「譜読みの仕方」によって仕上がりの演奏が変わるのかは、次の理由が考えられます。

●音の羅列の譜読みをすると、譜読みの

期間にその不自然さに慣れてしまい、耳が音楽を聴こうとしなくなる。

●指や手が、音の羅列のみの動きに慣れてしまい、指や手がフレーズや表情、強弱などに反応しなくなる。(よく歌うことも、よいテンポや正しいフレーズで演奏するのも、実際に「ピアノへ伝える動き」によって実現することを、忘れてはいけません)

つまり、「譜読み期間」に、耳も手も「音楽」に対し鈍感になる可能性があるわけです。これは、ピアノ演奏にとって致命的とも言えることです。

譜読みの段階で、音楽の様々な要素、テンポ、リズム、ハーモニー、そして形式、様式など、多くの項目に耳を傾けなければなりません。また、ピアノのテクニク上の諸問題、指使い、ポジション、弾くのに使う動きなど、弾く時に気をつけなければいけないすべての事柄も、読み取っていくべきだと思います。「仕上がりの良し悪しは、譜読みにかかっている」と言えます。

では、そのような「仕上がりの違う良

い譜読みの仕方」を、どうすれば実現できるかです。これには、様々な点から「ピアノ演奏」を検討し直さなければいけないと思います。

① 譜読みを定義し直す⇨本読みとの対応

譜読みとは何かを、もう一度深く考えてみましょう。

「譜読み」に対応することとして、「本読み」を考えると良いと思います。例えば学校で、みんなの前で夏目漱石の「吾輩は猫である」を暗唱して聴かせることになったと思ってみましょう。

つまり、夏目漱石の「吾輩は猫である」を朗読するのと、ベートーヴェンの「ソナタ第八番 悲愴」を演奏するのは、手順が同じだということです。

② 本読みの手順を考える

本読みの場合、まずゆっくり読み、段落に分け、分からない単語は辞書を引き、意味を理解する。段落ごとにゆっくりと、イントネーションや表情、間などにも気をつけて、部分部分を自分に読み聞かせて納得させて覚えてい



③ 数々の要素を検討し直す

く……ということになると思います。その間に、作者や登場人物の気持ちの変化も考え、それが深まるにつれて読み方が変化し、より多くを自分が感じ取ることで、他人にも伝わるようになってきます。これが本読みです。譜読みもこれに対応させれば良いと思います。

ピアノ演奏には、具体的な項目があ

ると思います。それらは互いに関連し合い、最終的に切り離すことができません。

音楽の三要素としては、リズム、メロディー、ハーモニーが挙げられます。そして演奏時に注意する項目としては、音色、音のバランス、歌い方などが挙げられます。音の持つ質感など、個々の要素もあり、声部同士の関係性なども問題になってきます。楽節や部分、形式にも考えを巡らさなければなりません。

これらすべてのことが多様に展開されることによって、音楽が作られているわけです。これらを総合的に把握し、理解することが「譜読み」だと言えます。

操作する個所としては「右手」「左手」「ペダル」に分けられ、さらに各指や前腕、二の腕、体全体の使い方などの項目も存在します。

これらの多くの要素を勘案しながら、譜読みを進めていき、音楽をそこに浮かび上がらせなければいけないわけです。

「譜読み」レッスンの実践へ

生徒が初めて見る楽譜で、先生がレッスンをこなすことが必要だと思います。ただ、勘違いしてはいけないことは、「先生が読んだものを生徒に与える」のではなく、「生徒に読ませ、そこで読んだものを整理し、どのように弾くべきかを考えさせる」、つまり「譜読みの時の様々な情報の整理の仕方」を教えるべきだと思います。

「分かる」ことが大切

「譜読みのレッスン」での目標は、二小節、あるいは一小節でもいいから、生徒が「音楽が分かった」という弾き方ができることです。

最初の段階で、ただだからだと長々弾くと、「今弾いたものの印象」がゼロになってしまいうでしょう。明日になったら「昨日、どんな曲を弾いたのかさっぱり覚えていない」ということになりかねません。「昨日はこのようなものを弾いた」という印象だけでも残さないと、自分の心や頭の中に、音楽を積み重ねていけないわけです。「上達する」

ということとは、今日行なったことを、ほんの少しでもどこかで覚えていることに他なりません。

両手でいっぺんに弾くか、

片手ずつ弾くか

最初の譜読みの時、一度に両手を読むのが難しい場合があります。

両手、片手の練習についても検討し直しましょう。もちろん片手練習は必要ですが、音楽は片手だけで完結してはいません。このことを自覚し、あくまでも両手で弾けることを目標にすべきです。

このためには、片手↓両手↓片手↓両手……と、頻繁に往復すると思います。この往復の間に、両手の関係に少しずつ気を回すといいでしょう。片手で弾く時は「両手になったらどうなるか」、両手で弾く時は「片手ずつの問題点は」と考えるのがいいと思います。

長期間「片手」だけの練習をしていると、「右手の弾き方に関係なく左手を弾くという状態」「全体像を構築できない状態」を作り出してしまいますし、

両手にした時に頭がパニックになってしまいます。

また、譜読みの時に、「手に覚えさせる」という発想も大切です。例えば指使いは、手、指が覚えることです。また、歌うためや音色を出すために、指、手、腕などを使います。熟練してくると、「手が音楽を考える」という状態になってきます。

ペダルに関すること

最初からペダルを入れてさらうと、タッチがいい加減になり、ごまかしてしまうことが多いので、ペダルなしで譜読みすることが多いと思います。

この場合も、「ペダルを入れたらどうなるか」という計算が必要です。往々にして、後からペダルを入れると、入れなかった時に弾いていた音がペダルによって広がり、響きが重く感じることが多くあります。ペダルなしで弾く時、逆算して幾分軽めのタッチでさらうといいと思います。

試しに、初歩の段階でペダルを踏ませるケースもあると思います。ペダルなし練習の合間に、ペダルを入れてみ

て、再びペダルなし練習に戻る。その時に、ペダルを踏んだ時の状態を想像して、タッチを変えていくこともあると思います。ペダルの「踏む」「離す」タイミングや、微妙な踏む深さについても気を配ることは、言うまでもありません。

全体を見通す

Ⅱ形式に対する意識を養う

全体を見通し、今はどのような部分を弾いているのかも考えられるといいと思います。提示なのか、展開なのか、難しい言葉は使わなくても、子どもはそれなりに図式や比喻などで理解できると思います。先生が、これから弾く曲の大まかな形式を示唆することもあるでしょう。ピアノ技術の発達に応じて、小さい形式から大きい形式へ、「形式に対する認識」もだんだん大きく、深くとらえるようになっていくと思います。

今述べてきた「譜読みのレッスン」は、「右手十回」「左手十回」「両手十回」などという、決まったパターンにあてはめられ

「譜読み」をレッスンする

初歩のうちから音楽力を養おう

ば済むものではありません。教師は生徒の状態をよく観察し、生徒自身が「何について考えて、何について考えていないか」「何を聴いていて、何を聴いていないか」を判断しつつ、「考えていないこと」「聴いていないこと」の方に目や耳を向けるように促すことが必要です。また、生徒が一人で練習する場合も、より深く考えることが要求されます。

譜読みで読み込んだことは、仕上がりの演奏に反映される。譜読みで読み込まなかったことは、仕上がりの演奏では反映されない。

私はこのように考えています。

* * * * *

それではここで、レッスンの実践です。生徒の理解力、学年、経験、知識などによって、臨機応変に対応していくことが必要です。

●教材..

モーツァルト／アレグロ *Op.3* (譜例)

とりあえずは、A、Bまでレッスンすることにします。

生徒の理解力、経験にもよりますが、最初にモーツァルトについてのお話などをするといいでしょう。

●弾く前に

まず忘れてはいけないことは、拍子、調、テンポの確認です。

調に関しては、変口長調の音階を弾かせます。多少の経験があれば、変口の音を与え、「ここから(長)音階を作ってください」と言うと、迷いながらも作れることもあります。迷いながらも、自分で音階を作ることが大切です。なぜなら、この時生徒は、「自分の内なる音」を捜しているからです。

テンポに関しては、Allegroの意味(ただ速いだけではなく、快速に、という意味であることも忘れずに)を教えます。今までAllegroの曲を弾いたことがあれば、「どんな曲だったかな?」と思いきさせることも必要です。

この曲の場合、二拍子は、「と」を入れて数える(1と2と)がよいと思います。もちろん最初から速くは弾けないので、ゆっくり弾くのですが、速い曲をゆっくり練習する時は、てきぱき

とテンポをとるようにすると、テンポの移行がしやすくなります。

たいていの場合、片手から練習することになると思いますが、読譜力があれば、両手で弾いてみてから片手ということも考えられます。

強弱に関しては、記してある版もあるでしょう。何も書いていなかった場合、レッスンの過程で、生徒の能力に応じて一緒に考えられるということもあると思います。

●指使い

版によって、指使いが書いてあることもありますが、ここで教師は、楽譜の指使いがその生徒に適切かどうかを判断し、提示することが求められます。譜読みの時、指使いも一緒に読み込み、覚える(頭で覚えるのではなく、手が、体が覚える)習慣をつけることが大切です。

必ず決めた指から出ること。(左手出だしは4または3、右手は5-4-2と続くのが妥当だと思います。)一回弾くごとに違う指使いを使うと、指が迷ってしまい、正しい弾き方が身につか

● 譜例 モーツァルト／アレグロ Kv.3 B-dur

なくなります。指使いを考える、模索することは必要ですが、一度「良い指使い」が見つかったら、毎回その指使いで弾き、「手を迷わせない」べきです。

● 分割について

生徒のキャパシティー（取り込み能力）によっては、Aの部分だけ練習して、Bの部分だけ練習して、後で合わせることも考えられます。その場合特に気をつけなければいけないのは、合わせた時に○で囲った休符を正しくとることです。これは、後半とつなげる時にも言えます。この曲の8分休符は、次の音の準備と考えるといいと思います。

● 左手

テンポをきちんととり、リズムに乗って弾く、指使いを正しく守る、手の状態をよく保つ、B—C—Dと上行する時の気持ちの変化、休符の取り方、次の音の準備……など、その時でできることを少しずつ増やし、促していきます。左手が音楽のベースになることも意識させるといいと思います。

● 右手

アフタクトの入り方に注意しましょう。心の中で必ず「1と2と」を数えるようにします。出だしの8分音符の前に、8分休符を感じるようにし、その休符を音出しの準備と考えるといいと思います。スラーのかかった二つの音を弾く時の手の動きに気をつけましょう。そのスラーだけ取り出して練習するのも、いいと思います。他にも、○で囲った休符のタイミングと次の音の準備、ハーモニー感のある演奏などもチェックすべき項目です。

● 両手

両手に移る前に、教師がもう片手を弾いて、うまく合うかどうかチェックするといいと思います。生徒が片手を弾きながら、先生の弾くもう片手の音も聴けるようにすることが大切です。片手から両手に移るのは、とても大変なことです。両手に移る前の段階として、教師がもう片手を弾いて合わせてあげる練習は、「聴く訓練」になると思います。



「譜読み」をレッスンする

初歩のうちから音楽力を養おう

両手に移った時に、左右のバランス、ハーモニー感などを確認させます。

片手ずつの練習がパーフェクトになつてから両手にする必要はないと思います。むしろ、前述したように、頻繁に片手→両手→片手→両手→……と往復する方がいいと考えられます。「両手を合わせる状態を考えながら片手練習をする。右手がこのように弾くから、左手はこのようにしよう」という意識をつけることが大切です。そのために、早い段階で両手の状態を知っておきましょう。

* * * * *

レッスンの中で、ある程度のテンポ、曲のリズム感、表情などが「できた」という感触があるまで、これらを繰り返すと良いと思います。教師には「生徒の頭の中の状態を把握しよう」と努めること、生徒が何を聴いていて何を聞いていないかをよく観察すること」が求められています。

片手を数回弾いて、両手で弾いてみて、

上手くいっているかどうか確認します。生徒が気づいていない項目があったら、「テンポはどうだったかな？ 音は弾んでいたかな？」などと特定のことにも目を向けさせましょう。そしてまた、その項目を気をつけて、もう一度片手で弾かせてみるのです。

このような言葉を通じて、生徒のキャパシティを増やしていくことが大切だと思います。片手→両手→片手→両手→……と進む中で、注意する項目を増やしていき、少しずつ高度な演奏にしていけます。

①教師は、「促す」役目に徹すること。「こうしなさい」ではなく、「この点はどうだったかな？」という問いかけをする。

②生徒が自分で「考える」「探す」ことを大切にすること。

③譜読みの時に注意しなければいけないことを生徒自身が把握し、一人で「音楽を読む」ことができるようになるのが目標。

上達するかどうかは、「毎回正しく弾い

ているか」「一回ごとにキャパシティを広げているかどうか」の二点にかかってきます。楽譜には、表面上「テンポに気をつけて」「このフレーズは歌って」などと書いていないことが普通ですが、その曲の内容からその表現方法を読み取ることが、本当の「譜読み」＝「音楽を読む」と考えるべきです。

おおたけ・みちや

東京音楽大学付属高校、大学、研究科を首席で卒業。読売新人演奏会出演。第53回日本音楽コンクール入選。87～90年ベルリン芸大留学。優等を得て卒業。

井口愛子、弘中孝、野島稔、山口優、クラウス＝ヘルヴィヒ各氏に師事。ベルリン自由放送、NHK-FM出演。ベルリン交響楽団、大阪音楽大学ザ・カレッジオペラハウス管弦楽団・モーツァルト管弦楽団と共演。

2007年に初めてのCD、「バッハ・ピアノリサイタル」(ライブ録音)を発売、2011年には「シューマン・子供の情景・クライスレリアーナ」を発売。また楽譜では、「ヴェーベルン/ピアノ作品全集」を校訂。

兵庫県明石市在住。(社)全日本ピアノ指導者協会(PTNA)正会員、ピティナ・ピアノコンペティション審査員。1992年より大阪音楽大学非常勤講師。

音源サイトでは100曲を超える演奏を公開する。

<http://www.piano.or.jp/enc/pianist/0039.html>

メールを通じてピアノ・レッスンの相談も行なっている。

ホームページ：<http://www8.ocn.ne.jp/~m-ohtake/>